

小学校体育科における系統性を考慮した 技能習得とコミュニケーション能力の育成

－ボール運動（ネット型）における実践を通して－

Skill acquisition and training of communication skill
in consideration of sequences in elementary school physical education
-through exercises of ball games (net/wall type games) -

池田 勉*・石川 英志**

IKEDA Tsutomu and ISHIKAWA Hideshi

はじめに

今回改訂された小学校学習指導要領において、体育科では「ネット型ゲーム」ないし「ネット型」（以下、「ネット型」と呼称する）が必修となった。前回の学習指導要領では、中学年では「内容の取扱い」の中で「バレーボール型ゲームなどを加えて指導することができる」、高学年では「ソフトボール又はソフトバレーボールについては、地域や学校の実態によっては取り扱わないことができる」と示されていた。そのため、これまでは多くの小学校で「ネット型」を積極的に取り扱ってきたとは言えない現状があり、これから「ネット型」の授業に向き合う際に表出する課題はどの学校にも該当すると考えられる。

これまで筆者（池田）が「ネット型」（主としてソフトバレーボールなど）の授業を実践してきたなかで、課題として残してきたことに、基礎的な技能（オーバーパスやアンダーパスなどの個別の要素的な技術）やゲームに必要な技能（仲間との関係性を含めた状況に応じた動き、チームの戦術としての連携的な動きなど）の習得がある。ボールゲームを楽しむためには、レシーブやパスなど最低限の技能が保障されなければならないが、子どもたちがゲームの特性を十分に味わっていくためには、限られた時間（単元）のなかで何を身に付けさせなければならないのかを明確にすることが課題であると考えられる。基礎的な技能を身に付けていくには、かなりの時間を要するが、それだけを繰り返し練習してもゲームの向上にはつながらない。そこに必要となるのが、ゲームに必要な技能である。これについては、単元の最後にどのようなゲームの様相を目指し、それに向けてどのように段階的に指導を行っていくかが課題となる。「どんなゲームがよいのか」、「どんな考え方で行えばよいのか」などを授業者自身が曖昧なまま指導しては、当然子どもたちは目指す姿がわからないまま何となく活動するという状況に陥ってしまう。中には、「自分たちでもっとよいゲームができるように考えよう」と子どもたちに課題を丸投げしてしまうような場面も見受けられる。単にゲームを繰り返しても、質的な発展にはなかなかつながらない。その場合、十分に「ネット型」の楽しさを味わえないままに、単元を終了してしまうことになる。「ネット型」は、ボールが空間にある短い時間にプレーの判断を行い、それに基づいた動きを行うという難しさがあり、ゲームに必要な技能を習得していくためには、各時間において子どもたちの実態を確実に把握するとともに、身に付けさせたい動きをより明確にして指導する必要がある。小学校学習指導要領解説体育編にも、「基礎的・基本的な技能を確実に習得させていくことが重要である」と示されている。技能習得のための系統性を考慮した指導内

* 岐阜大学大学院教職実践開発専攻（教職大学院）・岐阜市立加納小学校

** 岐阜大学大学院教職実践開発専攻（教職大学院）

容を明確にして指導にあたることによって、子どもたちが確実に基礎的な技能を身に付けていけるようにしていかなければならない。

「ネット型」は、これまで実践経験の差が大きく、今後多くの小学校で系統性を考慮した指導の在り方が課題になると考えられる。本論は、系統性を考慮した指導の在り方について考える基礎的な作業として位置付けられる。そのことは、体育を専門としない教師が「ネット型」に取り組む際の基本的な考え方を提示することにもつながると考える。

1 小学校体育科の授業における現状と課題

小学校体育科の授業の実際の現状についてまず探ってみた。ここでは、岐阜市立A小学校における二つの「ネット型」の授業に基づいて、技能習得の課題や、体育を専門としない教師がどのように「ネット型」の授業に向き合おうとしているか、その現状を捉える。

(1) 実践例 1

実践例 1 は 4 年「ワンバウンドバレー」の実践（平成23年10月7日）である。授業者は、これまでも何度か「ネット型」の授業実践の経験がある9年目の男性教諭である（体育が専門であるが、担任ではない）。授業では、開始早々から子どもたちの元気の良い声が体育館に響き渡り、主体的に準備運動に取り組む姿や教師の指示に対して練習から素早く切り替えて話を聞こうとする姿などから、体育科の学習における学び方の指導が確実になされていることが推察された。リーダーの指示を中心に、子どもたちはグループ内で関わり合いながら準備運動に取り組んでおり、コミュニケーションが十分に図られている様子が見られた。

当日はあいにくの天候のために体育館で2学級が体育を行う状況になったので、教師の課題提示の後、十分な練習がなされないまますぐにゲームを行う展開となった。

本時は第5時にあたり、「課題」は「自分の場所を決めて相手に返す」であった。授業者の意図は、子どもたちの現状として、自分のもとに来たボールに対して動けていないため、「自分が立っている位置の近くに来たボールに対して、責任をもって触球していけるようにさせたい」ということであった。実際、ゲームの様子を見ると、ボールに対して足を踏み出すことができず、その現状を変えていきたいという授業者の意図を見取ることができた。しかし、子どもたちはボールを返したいという願いをもっており、コート上における自分の位置に関する空間認識も把握していたように思われた。そのため、むしろ次のような二つの内容を指導することが必要ではないかと考えた。

①動き方の理解と習得

一つは、ボールに対してどのように動いていくとよいのかという動き方の理解と習得である。この段階では、ボールが来たときに素早く動けるようにするために構えて待つ（姿勢を低くする）ことや、ボールに対して正面や下に入り込むことの大切さを十分に教え、身に付けさせていく必要がある。実態としては、ほとんどの子どもは、突っ立ったままボールを待ち、ボールが飛んできてから慌てて動くという姿であった。「場所を決めて」ということが本時の課題であるならば、ローテーションを行わずに位置を固定し、まずは自分の決められた位置での動き方を身に付けさせていく必要があったのではないかと考える。それは、自分が立っている位置ではどの範囲までのボールをとったらよいのかという判断ができないままに、次々と位置が移動していくからである。自分の位置を決め、どのように動くかという理解させるとともに、練習やゲームを行いながらその都度動きを確かめ、それを繰り返すことによってはじめて身に付けていけるのではないだろうか。



②ボール操作の仕方

もう一つは、自分のもとに来るボールに応じたボール操作の仕方である。ゲームでは、アンダーパス⁽¹⁾の多用によるミスが多さが目立った。特に、今回はワンバウンドバレーという条件に基づいた動きとして、バウンドさせてから操作することが多くなるため、ボールの弾み方によって当然アンダーパスによる操作が増える（ソフトバレーボールでも、この時期の子どもたちにパスをさせると、必ずと言ってよいほどアンダーパスでボールを操作したが。それは、ボールに力が伝わりやすく、ボールが遠くまで飛んでいくからである）。しかし、技能が十分に身に付いていない段階では、腕の適切な部分にボールを当てることができず、仲間がカバーできないような場所にボールが飛んでいってしまうことが多い。遠くに飛ばしたいという思いが強いほど、腕を大きく振って、さらにミスが増えることがよくある。ボールはネットを越えて相手コートから飛んでくるので、基本的には自分の頭より上から飛んでくることが多い。したがって、高い位置でボールを操作すれば、ネットを越えたり、ボールが空間にある時間が長くなって、次の操作へとつなげやすい。

しかし、子どもたちはボールを飛ばすことに意識が向くために、落ちてくるのを待ってアンダーパスで対応するという様子が多く見られた。また、動き出しが遅いためボールの下に入ることができず、アンダーパスでしか対応できないという様子も多く見られた。アンダーパスを多用する原因には、手の力が弱いことやオーバーパスの技術が未熟であることも考えられる。こうした実態に対して、腕を振らずに軽く当てる感覚や膝を使って上げる感覚をつかませていくというアンダーパスの技能面の指導、さらにはオーバーパスを使ってボールを操作できるようにする指導が必要であったと考える。授業者は、子どもの動きに潜むこうした課題を把握し、適切な指導を行う必要がある。また、子どもたちのめあてや聞き取りから把握したゲームに対する願いは、「勝ちたい」、「楽しくやりたい」というものであった。こうした課題の解決や願いの達成のために、本時ではどんな技能面のポイントを意識して練習やゲームに取り組みせたらよいかという授業者の技能面へのアプローチが十分でなかったと考えられる。授業後に、授業者にゲームで何を大切にしているのかを聞いたところ、筆者（池田）が重要であると考えていたことと同様であった。したがって、身に付けさせたい動きについては理解しているものの、そのために目の前にいる子どもたちにどのような技能面の指導をすればよいかという本時レベルの指導内容について再検討の必要があると考える。



また、技能の習得に関わって、ゲーム中の子どもたちのコミュニケーションについても、指導の見直しを図っていく必要がある。ゲーム中に子どもたちがかけ合っていた声は、「おいしいよ」、「ドンマイ」、「次がんばれよ」といった仲間を励ます内容が大半を占め、技能のポイントに関わる内容がほとんどなかった。授業者は、本時で大切にしたい声のかけ方について課題提示の際におさえていたが、実際のゲームを通して声のかけ方に関わる指導は行われていなかった。本時でどんな声をかけ合えるとよいのかを明確にすると同時に、その声をどの場面でかけるのかを実際のゲームを通して指導していかないとなかなか身に付いていかない。体育の授業は広い場所で行われるので、教師がいつも全体を見ていられるわけではない。そのため、子どもたち同士で観察し、励まし、アドバイスして学び合う集団へと高めていくことが大切である。

以上、述べてきたことを次の表に整理する。

表1 実践例1の分析・考察に基づく指導案(試案)

	1 実際の授業の展開	2 池田案1	3 池田案2
課題となる子どもの実態	(授業者の捉え) △自分のところに飛んでくるボールに対して動けずにボールがすぐに落ちてしまうことが多い。		(池田の捉え) ・アンダーパスによるミスの多さが目立つ。
本時の課題	◎自分の場所を決めて相手に返す。	◎姿勢を低くして待ち、ボールに体を向けて、体の正面でボールをとろう。	◎できるだけボールを高い位置で操作し、1本目のボールを山なりに上げて仲間につないだり、返したりしよう。
課題設定の意図	よく動ける子はボールに触れるが、意図しないところへボールが飛びやすく、つながらない。場所を決めて、誰がとるのかを明確にしたい。	突っ立ってボールを待っているため、ボールに対する反応が遅い。足を動かさずにその場でボールを受けようとする。そのような姿の改善。	腕の適切な部分にボールを当てられず、仲間がカバーできないような軌道や場所にボールが飛んでいくことが多い姿の改善。
教師の手だて	自分のところへ飛んでくるボールを責任をもってとり、上げたボールを他の仲間がつけられるようにする。 ○声を出して、誰がとるのかをはっきりとさせてつなげる円陣パス ・みんなでつなげる。 ・ボールに応じて、ワンバウンドでとるように声を出す。 ・最後までボールを追いかける。 ◇個に応じた指導(規準Cの子に対する指導) ・こう動くときよという声かけ。	飛んでくるボールに対して、どのように動いて受けるかをつかませる。 ○相手コートからボールを投げ入れ、返す練習 ・全員構えてから投げ入れる。 ・常にボールに体を向ける。 ・足を動かし、体の正面でボールを操作する。 ◇個に応じた指導(規準Cの子に対する指導) ・1対1で、山なりのボールを少し横にずらして投げてやることで、足を動かして体の正面でボールを受ける動きをつかませる。(まずはボールを正面でキャッチすることから始める。)	自分のところに飛んでくるボールに応じたボール操作の仕方をつかませる。 ○相手コートからボールを投げ入れ、返す練習 ・高さや場所の違いボールを投げ入れる。 ・ボールの高さや速さに合わせて、ボール操作の仕方を決定する。 ・頭より高いボール、ネット近くのボールはできるだけオーバーパスを使う。 ・安定しやすいオーバーパスで操作する機会を増やすために、ボールの下に素早く入る。 ◇個に応じた指導(規準Cの子に対する指導) ・1対1で、高さの異なるボールを投げてやることで、場面にに応じてどのようにボール操作をしたらよいかをつかませる。
コミュニケーションに関する内容	(指示の声) 「○○さん」ーパスをするとき、ボールがきたとき (励まし) 「がんばれ」「ドンマイ」 ・集団面の課題「仲間と声をかけ合って楽しくやろう」	(指示の声) 「構えよ」「○○さん」「オーライ」「ハイ」 (助言) 「正面で」「体を向けるよ」 ・ボールに対してどう動くときよのかを具体的な動きで示したり、一緒に動いてみたりしながら、動き方を理解できるようにする。	(指示の声) 「オーバー」「上で」「アンダー」 「動いて」「○○さん」 (助言) 「今はボールがこう来たから、オーバーでやるよ。」 「アンダーの時は、腕を振らないように、運ぶような感じでやるよ」 ・どのボールに対して、どのようにボール操作をすればよいかを具体的な動きで示したり、やらせてみて動きをつかませたりする。

1 は、実際の授業の展開をまとめたものである。2 は、授業者が前時に捉えた子どもの実態から、筆者(池田)が本時で指導すべき内容(①動き方の理解と習得)として捉え直した指導案である。3 は、筆者(池田)が捉えた子どもの実態に基づいて、指導の必要性のある別の内容(②ボール操作の仕方)を本時の指導内容として位置付けた指導案である。子どもたちの実態に応じた適切な課題を設定し、具体的な練習方法や個に応じた指導によって、子どもの技能やゲームの様相を高めることを意図している。

(2) 実践例2

実践例2は6年「ソフトバレーボール」の実践(平成23年10月7日)である。授業者は、今回初めて「ネット型」の授業を行った教職経験8年目の男性教諭である(体育は専門でない)。授業前に子どもたちは体育館に集まり、集まってきた子どもからネットを張る等の準備を始めた。ただし、○○

係といった役割分担は行われておらず、集団としての動きには弱さが感じられた。

本時は第4時にあたり、「課題」は「ボールを落とさずに返そう」であった。特に、「2本目のボールに集中する」ことを意識させようとしていた。ボールを落とさないために何に気を付けるのかという技能面のポイントのおさえは十分とは言えないようであった。この学年は、平成21～22年度「ネット型」ゲームを経験してきており、「ネット型」の楽しさやある程度のボール操作の技能、ゲームでの動き方などを身に付けてきている。グループ練習では、相手コートから投げ入れられたボールをオーバーパスで返球する練習や、レシーブトスーパス（返す）という3本返球の練習などを行っていたが、予想以上につなげて返すことができている。子どもたちが主体的に練習に取り組んでいる姿が見られ、どんな練習をしたらよいかをこれまでの授業で指導してきていることがわかった。練習内容が明確にされており、しかも実態に合う練習に取り組んでいるグループでは、子ども同士で動きをめぐる声が増えかけられており、動きとコミュニケーションがともに高まっていることを捉えることができた。同時に、グループ間の差が大きいことも捉えることができた。ゲームでは、サーブだけで決まってしまうことを避けるために、投げ入れること（投げ入れサーブ）から始まっていたが、それでもグループによっては1本目を拾うことができず、サーブだけで決まってしまう状況が見られた。このグループは「2本目のボールに集中する」という本時の「課題」に向かう手前の段階（まず1本目を拾うこと）にあり、「課題」と「実態」との間にずれが見られた。1本目が拾えない要因としては、ボールの下に素早く動けないことや、アンダーパスで腕を振るせいでボールを意図しない方向へはじいてしまうことが挙げられる。また、仲間が失敗した時に、改善の方法を教え合う姿が少なく、ゲームの流れを変えることができない様子も見られた。ただし、グループの実態に即した課題が設定され、それに応じた取組が行われているグループも見られた。そのようなグループでは、ボールをつないだり返し合ったりしてラリーが続く好ゲームも見られた。その要因はオーバーパスが使えることと、アンダーパスでボールの軌道を整えられる子どもがいることにあった。

振り返りの場面では、準備されていた学習カードに子どもたちが本時の振り返りを記入していた。そこには、単元10時間分の運動面及び集団面の各時の課題が教師によって記されていた。体育専門でない担任が初めて実践する「ネット型」の授業であったが、1時間の授業を通して、子どもたちが何とか上達するように努力している姿が見られた。実践例2から次の二つの課題を捉えることができた。

①見通しをもった計画を基にした本時の授業の位置付け

単元計画が確実に立てられ、学習カードが準備されていたことは大いに評価できるが、計画に位置付けられた「各時の課題」と子どもの実態とのずれをどのように埋めていくかということが、授業者の今後の課題であると考えられる。端的に言えば、「本時の課題」を子どもが真に自分取り組みたい、取り組まざるを得ないものとして設定するということである。本時の課題「ボールを落とさずに返そう」を子どもの実態に応じて具体化し、「1本目をコートの中真ん中に山なりのボールを上げよう」とか「2本目のボールをつなぐために、ボールにへそを向けて待とう」など、目指す姿が分かるものにしていく。それをただ教師側で設定するだけでなく、子どもが自分自身のものとして必要感、切実感をもって捉えることが大切であると考えられる。複数のグループがある以上、すべてのグループの実態が本時の「課題」に合致する場合ばかりではないことは当然である。その場合、子どもの実態から、何を課題として引き出し、さらに本時の「課題」として設定するかということが重要になってくる。本時で取り上げた「課題」とずれのあるグループに対しては、どのような指導・援助を行っていくのかということに合わせて考えていくことが必要である。

②機能的に活動できるグループの育成

体育科では、技能の向上と合わせて集団を育成していくことが不可欠である。それは、集団での活動を通して学ぶことが学習活動の中心になるからである。技能面の指導と合わせて、グループとしてどのように活動したらよいかを指導していかなければならない。集団面の指導は、学年の発達に応じ

て段階的に行っていくことが必要である。しかし、その点の指針について、学習指導要領や同解説に明確に示されておらず、学校現場の裁量に委ねられていると言ってよいだろう。従って、個々の教師は、何となく指導するあるいはほとんど指導しないといった場合もあり、高学年になってもグループが機能していないこともよく見られる。

そこで、集団を育成していくための指針として、学年の発達に応じたコミュニケーション能力の明確化とそれに対応した教師の指導方法の構築が課題として挙げられる。

(3) 二つの実践例から捉えた課題

以上、二つの実践例ではあるが、その分析を通して三つの課題を捉えることができよう。

①ボール操作の技能とゲームの様相に対する指導

子どもの実態を考慮し、実践例1では「ワンバウンドOK」、実践例2では「投げ入れサーブ」という条件を取り入れていた。それらの条件を取り入れることは、単に子どもたちができないから、難しいから考慮するというだけでなく、どのようなゲームをさせたいのかという授業者の願いに基づくことが望ましいだろう。小学校学習指導要領解説体育編には、中学年では「易しいゲーム」(子どもが取り組みやすいようにしたゲーム)、高学年では「簡易化されたゲーム」(ゲームのルールや様式を修正し、学習課題を追求しやすいように工夫したゲーム)を取り扱うと示されているが、単に「易しいゲーム」や「簡易化されたゲーム」を行えばよいというのではなく、何を身に付けさせたいのかという意図を明確にしたゲームを行うことが大切であろう。筆者(池田)のゲームに対する基本的なスタンスは、「子どもが今持っている技能で楽しめる」ということである。その一方で、よりよいゲームを目指して、子どもたちの技能を高めていくために、毎時間準備運動の中にパス練習等を取り入れながら繰り返し練習させたり、ゲームの中でも学年に応じたボール操作の技能面のポイントを確認していったりする必要があると考える。ワンバウンドバレーとして取り扱うならば、ワンバウンドするボールの軌道を子どもたちに分かりやすく示し、また子どもと一緒に確認し、それに合わせた動きを指導することが当然必要となる。高学年では多くの学校でソフトバレーボールを取り扱っているが、中学年で実践するとき、ソフトバレーボールへと技能面でどうつなげていくのかということも考慮していかなければならない。つまり、単元の最終段階で目指すべき姿をどう描き、それに対応してゲームの様相をいかに高めていくのか、そのために必要なボール操作の技能を系統的にいかに指導するかをより明確にしていく必要がある。

②技能習得に関わるコミュニケーション

二つの実践例から見えてきたゲーム中の子どものコミュニケーションに関する共通課題とは、得点が決まった時に喜ぶ声や失敗したときに励ます声はあっても、課題の達成や動きの修正に関連するアドバイスや指示の声が少ないことである。例えば、仲間がどう動けばよいかわからずにいると判断される状況で、こんなアドバイスを出せるといいねという例を示したり、「○○さんはこんな声をかけていたよ」とこれまでの子どもたちの動きを踏まえた指導を積み重ねていかなければならない。技能面での指導と対応させて、子どものコミュニケーション能力を育てていかないと、集団で学習する(教え合う)ことによって個々の技能を高めていくことはできない。二つの実践例の分析を通して、集団のコミュニケーション形成に関わる課題(実践例1:技能のポイントに関わる声の明確化と指導、実践例2:学年の発達に応じたコミュニケーション能力の明確化とそれに対応した教師の指導方法の構築)を示してみたが、さらに言えば、6年間の指導の積み重ねの中でコミュニケーションに関する系統性を意識してその能力を高めていくという課題が見えてくる。

③体育を専門としない教師の体育科授業及び「ネット型」に向かう姿勢

実践例2では、課題が板書に明確に位置付けられ、学習カードが準備されているというように、基本的な学習体制は整えられていたが、これまでの様々な経験などの聴き取りによれば、不十分な環境

のままに授業が展開されていることが少なくないようである。A小学校での聴き取りから、「ネット型」に関して、指導経験や基本的な知識の少ない教師が多く、基礎的な技能やゲームへの指導方法に不安があること、さらには不安どうこうという前に、よくわかっていないという状況の一端も把握することができた。そのような状況を解消するために、ネット型に関する既存の指導計画や関連文献を参考にしたり、体育を専門とする同僚教師や「ネット型」の授業経験のある教師に教えてもらったりすることが今後の取り組むべき事項となるだろう。また、体育科の授業は、教室での授業と異なって広い空間で行うために、子ども一人ひとりを把握して指導・援助することがそもそも難しいという観点から、いかにグループの中で教え合う関係を構築していくか（②のコミュニケーションの育成）が他教科にも増して重要な課題となってくる。体育を専門としない教師は、集団面での育成に対する意識が弱いのが現状であろう。

2 学習指導要領解説から考える

次に、二つの実践例の分析から見てきた課題に関して、小学校学習指導要領解説体育編ではどう述べられているかを概観してみたい。

(1) ボール操作の技能とゲームの指導の在り方

①ゲーム・ボール運動の内容の変遷について

1989年以降の「ゲーム・ボール運動」領域に関する内容の変遷について概観する。

表2 1989年以降の「ゲーム・ボール運動」領域の内容の変遷

低学年	中学年	高学年	中学校
1989			
(基本の運動) ボール遊び 鬼遊び	ポートボール ラインサッカー ハンドベースボール	バスケットボール サッカー ソフトボール又は ソフトバレーボール	バスケットボール又はハンド ボール サッカー バレーボール テニス・卓球又はバドミントン・ソフトボール
1998			
(基本の運動) ボールゲーム 鬼遊び	バスケットボール型ゲーム サッカー型ゲーム ベースボール型ゲーム	バスケットボール サッカー ソフトボール又は ソフトバレーボール	バスケットボール又はハンド ボール サッカー バレーボール テニス・卓球又はバドミントン ソフトボール
2008			
ボールゲーム 鬼遊び	ゴール型ゲーム ネット型ゲーム ベースボール型ゲーム	ゴール型 ネット型 ベースボール型	ゴール型 ネット型 ベースボール型

小学校では、1989年の学習指導要領からソフトバレーボールが内容に入ってきたが、冒頭で述べたように「ネット型」が必修となったのは今回が初めてである。1989年以前を見てみると、1949年の学習指導要領小学校体育編（試案）にはバレーボールが小学校の運動領域の内容として挙げられたが、それ以降取り上げられてこなかった。それは様々な議論が展開された結果によるものであろうが、小学校で取り上げずに中学校から指導することにした背景には、小学校で扱う難しさを実感する教師が少なくなかったことが推察される。ところが、今回そのような種目が「ネット型」として必修になったのである。そこには、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培うにふさわしい種目として位置付け、小学校段階から運動の系統性を図って、指導内容を確実に身に付けさせていこうとする

意図が働いていると考えられるが、そうしたこれまでの背景を踏まえて指導していく必要がある。

前回までの学習指導要領では、低学年に「基本の運動」があるものの、全体としては種目別に配置されていたのに対して、今回はじめて領域別に示されることになったのは最も大きな変化である。これによって「基本の運動」の中で指導が行われていたボール操作などの基本的な技能については、「ボールゲーム」の中で指導することになった。また、中学年以降のボール運動系の内容については、これまでのように種目固有の技能としてではなく、攻守の特徴（類似性・異質性）や「型」に共通する動きや技能として系統的に身に付けるという視点から、種目が整理された。その背景には、運動種目を「①侵入型、②ネット・壁型、③守備・走塁型、④ターゲット型」や、「Ⅰ 攻守入り乱れ系（①シュートゲーム型・②陣取りゲーム型）、Ⅱ 攻守分離系（①連携プレイ型・②攻守一体型）、Ⅲ 攻守交代系」と分類するゲームやボール運動の分類論⁽²⁾が働いていると推察される。ボール・ゲーム領域の授業を計画するにあたって、当然こうした改訂の意図を考慮しなければならない。しかしその一方で、種目が特定されなくなったことによって、多様な「素材選択」や「教材づくり」といった教師の柔軟で創造的な取組の可能性が広がったとも解することができる。だからこそ、身に付けたい力を明確にし、そのためにどの種目をどのようなルールや条件で取り扱うかという教師のスタンスを自覚的に形成することが重要になってくる。

さらに、今回の改訂では、「各運動領域においては、指導内容を整理し、当該学年で身に付けさせたい具体的な内容を明確に示す」とあるが、具体的な内容がどう示されているのかを、前回の学習指導要領解説の第5学年及び第6学年の内容と比較する形で見てみよう。

表3 「ネット型」の指導内容の比較（1998年と2008年）

種目	1998 ソフトバレーボール	2008 ネット型
目標	(ボール運動) チームに適した課題をもって次の運動を行い、その技能を身に付け、簡単な作戦を生かしてゲームができるようにする。	(ボール運動全体として) 運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。 ネ 簡易化されたゲームで、チームの連携による攻撃や守備によって、攻防をすること。
指導内容	ネットをはさんで攻撃を組み立て、または防御を工夫してボールを打ち合うゲームの特性に応じて、防御から攻撃への連携プレーを生かしたゲームをする。なお、ボールは軽くてやわらかいものを使用する。 (7)各ポジションの動きを理解し、両手や片手でボールを相手コートに落としたり、状況に応じてボールを操作したりする。 (4)ホールディングやネットタッチなどのルールを理解し、審判をする。	操作しやすいボールを用いたり、ボール操作についての制限を緩和することを通して、連携プレーによる攻撃やそれに対応する守備がしやすくなるように簡易化されたゲームをする。 (7)軽くてやわらかいボールを片手や両手で操作したり、チームの連携プレーによる攻撃が成り立つようにすばやく場所を移動したりして、ネットをはさんだゲームができるようにする。 (4)ボール操作についての制限を緩和したボールがつながりやすい状況の中で、相手コートにボールを打って返すことができるようにする。
例示	(記述なし)	○ソフトバレーボール ○ブレルボール ・自陣のコート（中央付近）から相手コートに向けサーブを打ち入れること。 ・ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動すること。 ・味方が受けやすいボールを返すこと。 ・相手コートにボールを打ちつけること。

まず、今回の学習指導要領解説には、ネット型の目標及び例示が位置付けられたことがわかる。その目標からは、「簡易化されたゲーム」、「チームの連携」がポイントになると考えられる。指導内容を見ると、前回は「各ポジションの動きの理解」や「ホールディングやネットタッチなどのルールの理解」などの専門的な内容が示されていたが、今回は「ボール操作についての制限を緩和したボール

がつながりやすい状況」,「操作しやすいボール」など,条件を易しくした上でゲームを行うことが示されており,ネット型の基礎技能の習得を踏まえた上で子どもたちがネット型の特性を味わうことができることに重点が置かれていると読み取れよう。また,「すばやく場所を移動する」など,ボールを持たないときの動きに視点が当てられていることもわかる。前回に比べて,より具体的な内容が示されていると言えるが,その内容をいつどのように指導するかまでは示されておらず,実際の授業を行っていく際には教師による指導方法の具体的な工夫が必要となる。

②ネット型の系統性について

次に,「ネット型」の内容として示されていることを,第3学年及び第4学年と第5学年及び第6学年を比較する形で示してみよう。

表4 「ネット型」の内容の比較(3・4年と5・6年)

	3・4年 ネット型ゲーム	5・6年 ネット型
目標	ラリーを続けたり,ボールをつないだりして易しいゲームをすること。	簡易化されたゲームで,チームの連係による攻撃や守備によって,攻防をすること。
指導内容	(7) ごく軽量のボールを片手や両手ではじいて自陣の味方にパスをしたり相手コートに返したりして,ラリーの続くゲームをすること。また,弾むボールを床や地面に打ちつけて相手コートに返し,ラリーの続くゲームをすること。 (4) 自陣から相手コートに向かって,相手が捕りにくいようなボールを打ち返すゲームをすること。	操作しやすいボールを用いたり,ボール操作についての制限を緩和することを通して,連係プレーによる攻撃やそれに対応する守備がしやすくなるように簡易化されたゲームをすること。 (7) 軽くてやわらかいボールを片手や両手で操作したり,チームの連係プレーによる攻撃が成り立つようにすばやく場所を移動したりして,ネットをはさんだゲームができるようにすること。 (4) ボール操作についての制限を緩和したボールがつながりやすい状況の中で,相手コートにボールを打って返すことができるようにすること。
例示	○ソフトバレーボールを基にした易しいゲーム ○プレルボールを基にした易しいゲーム ・ボールの方向に体を向けたり,ボールの落下点や打ちやすい位置に体を移動したりすること。 ・いろいろな高さのボールを片手又は両手ではじいたり,打ちつけたり,相手のコートに返球したりすること。	○ソフトバレーボール ○プレルボール ・自陣のコート(中央付近)から相手コートに向けサービスを打ち入れること。 ・ボールの方向に体を向けて,その方向に素早く移動すること。 ・味方が受けやすいボールを返すこと。 ・相手コートにボールを打ちつけること。

5・6年の内容で示されている「簡易化されたゲーム」は,「ルールや形式が一般化されたゲームを,児童の発達段階を踏まえ,プレーヤーの数,コートの広さ(奥行きや横幅),プレー上の制限(緩和),ボールその他の運動用具や設備など,ゲームのルールや様式を修正し,学習課題を追求しやすいように工夫したゲーム」と説明されている。ここで留意すべきは,高学年において,中学校の「バレーボール」への系統性を重視した「ソフトバレーボール」を位置付けるのではなく,子どもたちが自ら「学習課題を追求しやすいように」することを目的として,子どもたちの実態に対する教師の観察や判断に基づいて,ルールや様式の変更や工夫がなされた「簡易化されたゲーム」を設定していくということである。したがって,子どもたちの実態を詳細に捉えて,それに応じて,ルールや様式の何を修正するかを教師サイドで判断して「簡易化されたゲーム」を設定し,その中で子どもたちがボール操作やゲームを存分に経験する中で,自分の取り組むべき課題を把握し追求できるようになることが重要なのである。このことは,「ネット型」の系統性を考える上でたいへん重要なポイントとなろう。筆者(池田)自身,これまで系統性と言えば,発達段階に応じてボール操作やゲームパフォーマンスな

どの技能をいかに向上させていくか、その段階や筋道の構成のみに目が行きがちであったが、それだけでなく、子どもたちが「ネット型」の楽しさ（ゲームの特性）を十分に味わうことのできるゲームを経験する、その中で自分の学習課題を追求しやすいようにすることにより重点を置くべきではないかと考えるに至ったのである。

なお、中学校学習指導要領解説保健体育編では、「ネット型のボールや用具の操作とボールを持たないときの動きの例」として次のように示されている。

表5 中学校学習指導要領解説保健体育編で示されている「ネット型」の指導内容

	小学校5・6年	中学校1・2年	中学校3年
ボールや用具の操作	<ul style="list-style-type: none"> ・中央付近からのサービス ・味方への山なりのレシーブ ・ネット上へのセットアップ ・頭上でのヒット 	<ul style="list-style-type: none"> ・中心付近をとらえたサービス ・返球方向へのラケット面づくり ・空いた場所への返球 ・操作しやすい位置へのつなぎ ・テイクバックをとった高い位置からの打ち込み 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらった場所へのサービス ・空いた場所やねらった場所への打ち返し ・攻撃につながる高さや位置へのつなぎ ・ネット際の防御や攻撃・強い振りでの高い位置からの打ち込み ・ポジションに応じたボール操作

小学校学習指導要領解説体育編で示されている「ネット型」に関する内容と、中学校学習指導要領解説保健体育編で示されている同型に関する内容を比べると、その内容にずれや重複が見受けられる。中学校の内容は小学校の内容を生かす形で示されていないのではないだろうか。小学校学習指導要領解説体育編では、中学校で視点として示されている「ボールを持たないときの動き」に相当する内容として「ボールの方向に体を向けたり、ボールの落下点や打ちやすい位置に体を移動したりすること」(3・4年)や「ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動すること」(5・6年)が例示されているが、中学校1・2年の動きとして示されている「ボールへの正対」とも重なる。小学校で行うソフトバレーボールなどと中学校で行うバレーボールでは、ボールやネットの高さ、コートの大さきなどの条件が違い、それによって動きが変わってくるため、一概に技能の系統として示すことは困難であると考えられるが、ここで、学習指導要領解説体育編の内容を小学校から中学校まで系統性を見るためにまとめてみよう(表6)。

1・2年の内容については、ネット型ゲームとして示されているものがないので、表6では「ネット型」につながるであろう動きを示してみた。中学校の内容には、テニスやバドミントンの動きについても示してあるが、系統性を考えた時、一口に「ネット型」と言っても環境面や仲間との連携といった視点から考えて「バレーボール」系を中心に扱うことになることは明らかであろう。こうしてまとめたものを見ると、いつ、どのようなことを指導するとよいか、各学年でのその内容項目一つひとつは分かるが、実際の指導に際してはその関連性や発達筋道すなわち学年段階を踏まえた系統性を考慮することが欠かせないだろう。しかも体育を専門としない多数の一般教師が指導にあたることを想定した場合、個別の技能の発達段階、それを踏まえたゲームの様相の発達段階とそれを支える物理的な条件等を一目見て認識できるように、明確かつ簡潔に示す必要がある。後掲の表7では、ソフトバレーボールを対象として示すことを試みたい。

(2) 技能習得に関わるコミュニケーションの在り方

体育の授業では、仲間とのコミュニケーションを図りながら技能の習得や向上を目指す。特にゲーム・ボール運動の領域では、チーム内のコミュニケーションの在り方がゲームの内容や結果に大きく作用する。そのため、身に付けさせたいコミュニケーション能力を明らかにしていくことが重要になってくる。

表 6 ゲーム・ボール運動「ネット型」系統表（学習指導要領解説体育編を基にしたもの）

学年	1 学年・2 学年	3 学年・4 学年	5 学年・6 学年	中学 1 学年・2 学年	中学 3 学年
単元名 及び内容	<p>ア ボールゲーム 「ボール遊び」 「ボール投げゲーム」 「ボール蹴りゲーム」 イ 鬼遊び</p> <p>※ ネット型につながらる動きを考えた時、「ボール遊び」において、キャッチボール的な遊びの中で動きの基礎を身に付けていく。また、体づくり運動の中で風船を使った運動などを取り扱うこともできる。</p>	<p>「ワンバウンド・パレール」 ○ワンバウンドを許容したり、触球数の制限を易しくしたりして、ラリーの続くゲームを行う。 ・ソフトパレールゲームを基にした易しいゲーム。 「パレールボール」 ○パレールだけでなく、レジーブやトスのようにボールを上げる動きも許容するなどして、ラリーの続くゲームを行う。 ・パレールゲームを基にした易しいゲーム。</p>	<p>「ソフトパレールボール」 「パレールボール」 ○連係プレーによる攻撃やそれに対する守備がしやすくなるように簡易化されたゲームを行う。 ・操作しやすいボールを用いる。 ・ボール操作についての制限を緩和する。</p>	<p>「パレールボール」「卓球」「バレーボール」「テニス」「バドミントン」 ○基本的なボール操作や仲間と連携した動きでゲームを展開できるようにする。 ・ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開できるようにする。 ・プレーヤーの人数、コート上の広さ、用具、ブレイ上の制限を工夫したゲーム。</p>	<p>「パレールボール」「卓球」「バレーボール」「テニス」「バドミントン」 ○作戦に応じたボール操作で仲間と連携してゲームを展開できるようにする。 ・ポジションの役割に応じたボールや用具の操作によって、仲間と連携した「拾う、つなぐ、打つ」などの一連の流れで攻撃を組み立てる。</p>
技	<ul style="list-style-type: none"> ・風船を落とさないように片手や両手ではじく。 ・ボールを高く投げ上げる。 ・ボールを落とさないように手のひらでキャッチする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごく軽量のボールを片手や両手ではじく。 ・平手打ちや両手打ちもOK。 ・相手コートへの返球。 ・味方へのパス。 ・弾むボールを打ちつける。 ・相手が捕りにくいようなボールを返す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽くやわらかいボールを片手や両手で操作する。 ・サーブ。 ・味方が受けやすいようにボールをつなぐ。 ・相手が捕りにくいようなボールを打ち返す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中心付近をとらえたサーブ。 ・返球方向へのラケット面づくり。 ・空いた場所への返球。 ・操作しやすい位置へのつなぎ。 ・テイクバックをとった高い位置からの打ち込み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらった場所へのサーブ。 ・空いた場所やねらった場所への打ち返し。 ・攻撃につながらる高さで位置へのつなぎ。 ・ネット際の防御や攻撃、強い振りでの高い位置からの打ち込み。 ・ポジションに応じたボール操作。
能	<ul style="list-style-type: none"> ・風船の動きを見ながら動く。 ・風船の落下点や風船を操作しやすい位置に体を移動させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールの方向に体を向ける。 ・ボールの落下点やボールを操作しやすい位置に体を移動させる。 ・ボールの高さに応じたボール操作の選択。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動する。 ・チームの連携プレーによる攻撃が成り立つように、素早く場所を移動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の打球に備えた準備姿勢。 ・開始時の定位置への戻り。 ・ブレイ後のボールや相手への正対。 	<ul style="list-style-type: none"> ・空いている場所へのカバーの動き。 ・フォローメーションの動き。

そこで、体育におけるコミュニケーションに関して、小学校学習指導要領解説体育編がどのような内容を示しているかを見てみることにする。

①コミュニケーション能力について

体育におけるコミュニケーション能力の育成に関して、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年1月17日）が直接言及しているのは次の箇所のみである。「体育については、体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように、発達の段階のまとまりを考慮し、指導内容を整理し体系化を図る」。

このように、体育が集団的活動や身体表現等を通じてコミュニケーション能力を育成することに資することが謳われているが、ただ単に仲間と共に体を動かしていればコミュニケーション能力が育つというものではない。仲間との関わりをどう築かせるか、どのようなコミュニケーション能力を育てていくのかを明確にして指導していく必要がある。

しかし、小学校学習指導要領では、コミュニケーション能力の育成に関わって、上記の答申を受けて、より具体的な内容や方策を示すことは行っていない。さらに、小学校学習指導要領解説体育編においても、具体的な記述は示されていない。「各領域の内容」では、唯一、表現運動系のなかに「表現リズム遊びの学習では、『表現遊び』と『リズム遊び』の両方の遊びを豊かに体験する中で、中学年からの表現運動につながる即興的な身体表現能力やリズムに乗って踊る能力、コミュニケーション能力などを培えるようにする」という記述があるのみであり、コミュニケーション能力の具体的な中身については何ら言及されていない。こういうことが背景にあるせいか、実際の授業においても、身に付けさせたいコミュニケーション能力を明確に意識した形で指導がなされていないのがこれまでの現状であろう。

しかし、体育の授業では、技能習得のために必要となる身に付けさせたいコミュニケーション能力を明確にし、それを意識的に位置付けた指導を行うことがこれからのたいへん重要であると考え。とくに「ネット型」では、チーム内のコミュニケーションの在り方によって、技能習得の過程やゲームの内容が大きく変わってくることは明らかであろう。

②仲間との関わりについて

小学校学習指導要領解説体育編において、「体づくり運動」や「表現運動」では、「コミュニケーション」ではないが、それに類する「仲間とのかかわり」という言葉を用いて目標や内容が示されている。「体づくり運動」や「表現運動」では、仲間とかわること自体が直接目的につながるからである。

ゲーム・ボール運動の領域では、次のような関連した記述がある。「ゲームは、勝敗を競い合う運動をしたいという欲求から成立した運動であり、主として集団対集団で競い合い、仲間と力を合わせて競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動である。ゲームの学習指導では、仲間と協力してゲームを楽しくすることの工夫や楽しいゲームを作り上げることが、児童にとって重要な課題となってくる。ボール運動は、ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動である。ボール運動の学習指導では、互いに協力し、役割を分担して練習を行い、型に応じた技能を身に付けてゲームをしたり、ルールや学習の場を工夫したりすることが学習の中心となる」。ここに出てくる「仲間と力を合わせて」「仲間と協力して」「役割を分担して」などの中身の重要な要素をコミュニケーションと捉え、それを現場サイドで明確にしていくように努める必要があると考え。

3 「ネット型」の授業を考える

必修内容となる「ネット型」の授業にいかに取り組みかをめぐって考えるために、小学校体育科の授業の現状と小学校学習指導要領解説体育編を中心に見てきたが、体育科を自分の専門教科としない教師が行う授業であっても、子どもたちが勝敗に一喜一憂することに終始しないで、基礎的な技能とともにゲームパフォーマンスを高め、「ネット型」の楽しさを十分に味わえる姿が多く見られることが期される。これまで「ネット型」の授業の指導経験がなく、今後初めて指導する教員が大勢いることは小学校体育科の直面する大きな課題の一つであるが、実際のゲームの文脈とは無関係なところで個々の技術を断片的に指導したり、「子どもに工夫させる、考えさせる」という名目で子どもにただお任せのゲームを重ねたり、ときには技能の高まりに目を向けずに「失敗しても責めない」といった人間関係の醸成を図ることのみで授業を進めたりすることがないように、ねらいを明確にして授業に向かうようにしていかなければならない。そのために、どのような内容を構成し、どのような学習過程を設定し、どのような学習集団を目指すかなど、授業実施へ向けて様々な準備が求められる。そこで、一つの手がかりとなるような技能及びそれに関わるコミュニケーションの系統性について試案を作成した。

(1) 技能習得に関わる内容について

ネット型の系統性について、今回の改訂の背景にある「型」に共通する動きや技能を系統的に身に付けるという側面と、ネット型で味わうことができるゲームの楽しさという両側面から考えてみた。

これまで、個々の球技種目の技能習得を重視する考え方と、ゲームの楽しさを重視する考え方とは、互いにその優位性を主張し合う議論が展開されてきた。技能中心に授業を遂行しても、結局はゲームではうまくできないという不満や諦めを教師と子どもの双方に生み出すことになったり、その一方で、ゲーム中心の授業では、個々の技能的な高まりが見られず、ゲームの質的発展がみられない、という声が繰り返し発せられてきた。技能練習がゲームに生きない、ゲームをしてもうまくならないというこのジレンマをいかに払拭していくかが「ネット型」の大きな課題というわけである。

ゲームの様相を高めるポイントとして戦術力が挙げられる。技術と戦術力との関係について、廣瀬勝弘は「技術力と戦術力は、どちらか一方が力量形成されていても、その発揮は難しく、相互に支え合わないことには、実際のゲーム場面において子どもの出来映えとして現れない」と指摘する⁽³⁾。「有効な」戦術は「確かな」技術によって裏付けされるというのである。よって、ゲームを楽しむためには、レシーブやパスなど最低限の技能が保障されなければならない。「技能を身に付けることを保証しながら楽しさを追求する授業」を目指すことが重要である。

しかし、ここで興味深い研究結果がある。リンクらの先行研究⁽⁴⁾によれば、技術中心群、戦術中心群、組み合わせ群で比較実験をしたところ、組み合わせ群の学習成果が実験群の中では最も低いという結果が出たという。その要因は、一言で言えば「情報過多」にある。「技術と戦術という二種類の課題は、学習者にとっては情報量として多すぎ、処理できなかった」ということであり、限られた時間では指導方法レベルで処理できないことが多々存在していると言及している。ボールの操作に慣れ、ゲームの特徴や進め方を理解して楽しむことを保証しようとする、10時間程度は最低限必要であると考えられるが、それだけの時間で技能を十分に高めていくことは極めて難しいだろう。スポーツ少年団や中学校の部活動のように繰り返し練習しても、ボール操作の技能を身に付けるには相当な時間が必要である。そう考えると、授業という場ではいかに指導内容を明確にして、何をこそ身に付けさせるかが重要な鍵となる。特に小学校段階について考えると、「確かな技術」を身に付けることは難しく、それゆえに戦術学習を展開していくことはさらに難しいと考えられる。技能の習熟レベルが低い場合には、ボールコントロールに対する負担が大きすぎて、状況に応じて「考える」（状況判断する）ことは極めて困難なことである。また、小学校の一般教師が指導にあたる場合、あまりにも専門

的な指導を要求すべきではなく、指導方法は多様であっても内容はシンプルに、「これだけは」というものを確実に習得させていくことを目指すことが必要である。指導内容を重点化して「技能を身に付けることを保証しながら楽しさを追求する授業」こそ目指すべき授業であろう。

戦術学習を展開することは難しいと今述べたが、ボールゲームの学習内容として戦術を位置付けることが重要なことも事実である。子どもの戦術的気付きを促すための発問を教師が行ったり、たとえ得点が決まらなくても意図的なプレーや想像力豊かなプレーについては、教師と仲間が評価したりすることによって、ゲームに対する子どもの動きや考え方を高めていく必要がある。ゲームの中で子どもの考える力を高めていくためには、ボールコントロールの負担をなくす、あるいは負担を軽減させたゲームを工夫し、子どもに考える時間を与える必要がある。また、小学校学習指導要領解説体育編にボールを持たないときの動きの重要性が示されているように、ボールゲームではボールを持っていない時間帯の使い方がゲームの質を決める重要なポイントとなる。ボールを持たないときの動きに関する教師の指導の在り方が、ゲームの質的な向上に大きく影響を与えるわけである。

以上のことから、ボール操作の技能、ボールを持たないときの動き、楽しさの3点について系統的な展開を構想した。

表7 ソフトバレーボールを基にした指導内容の系統表 (試案)

学年	1学年・2学年	3学年・4学年	5学年・6学年
目指すゲーム (楽しさ)	※ボールゲームにネット型ゲームを位置付けるのは難しい。学習指導要領解説にも、ネット型ゲームへの発展は示されていない。	ラリーの続くゲーム (ラリーを続ける楽しさ)	連携プレーによる攻撃やそれに対する守備を目指したゲーム (連携プレーで攻める楽しさ)
ルール・条件等		・ドリブル・触球数の制限をなくし、ラリーが続くようにする。	・実態に応じてキャッチやバウンドを認め、連携プレーによる攻撃がねらえるようにする。
		計量のボール：50g程度 チームの人数：3～4人 ネットの高さ：180cm程度 コートの大さき：バドミントンコート	計量のボール：100～150g程度 チームの人数：4～6人 ネットの高さ：200cm程度 コートの大さき：バドミントンコート～6人制バレーコート
ボール操作	・ボールを落とさないように手のひらでキャッチする。	・片手や両手でボールをはじく。 ・味方へのパスや相手コートへの返球	→ → → ・相手が捕りにくいボールを返す。
		※高い位置でボールを操作できるようにする。(オーバーパスにつなぐ)	※ある程度意図したパスができるようにする。
ボールをもたないときの動き	・ボールの落下点に体を移動させる。	・ボールを操作しやすい位置に体を移動する。 ・ボールの方向に体を向ける。	→ → ・素早く場所を移動する。

(2) コミュニケーション能力の育成に関わる内容

技能の向上を目指すには、教師中心の一斉指導を行うだけでなく、仲間と学び合う場を設定し、さらに活発に行えるように指導していくことが体育科の授業では不可欠であろう。技能や知識とともに、学習集団の育成も重要な学習内容として指導者に強く意識される必要がある。岐阜県学校体育研究グループ「偶土会」⁽⁵⁾では、集団における学習のメカニズムに関する実践研究を長期にわたって継続的に展開し、グループ内での役割に関する指導を通して集団性の発達を促す体育授業の在り方を解明してきた。

本研究では、偶土会の研究も手がかりとして、「ネット型」における技能習得に関わるコミュニケー

コミュニケーション能力を高めていくことを目指そうとしている。これまで展開されてきたボールゲームの授業において、子どもたちはいかなる充足感を得てきたのだろうか。目まぐるしくボールが飛び交うゲーム状況の下で、自分がどのようなプレー選択を行えばいいのかがわからず突っ立ったままの子もいれば、パスやサーブなどの技能を習得しても実際のゲームになるとそれらをうまく活用できない子もいる。そんな子どもたちがゲームの楽しさを十分に味わうことができるようにしていくためのコミュニケーションについてまずは試案を示したいと考えた。それが次の表8である。

表8 「ネット型」における技能習得に関するコミュニケーションの発達に関する系統表（試案）

学年	1学年・2学年	3学年・4学年	5学年・6学年
目指す姿	「一緒に活動する」	「助け合って活動する」	「力を出し切って活動する」
集団性の発達	(道筋) 所属 一人ひとりがばらばら	－ 同 調 － 協 力 － みんながそろろう － 進んで援助	－ 連 帯 － ひとつにまとまる
準備・片付け	・全員で準備・片付けをする。	・リーダーの指示に従って準備・片付けをする。	・分担に従って準備・片付けをする。
課題設定	・ペアでの確かめ合い ・やってみて、自分のめあてをもつ。	・3～4人程度の話し合い ・具体的な回数や姿などで、自分やチームのめあてを決める。	・5～6人程度の話し合い ・前時の姿などから、自分やチームに必要な課題を決める。
練習・ゲーム	・楽しくゲームができる場や得点の方法などの規則を選ぶ。 ・攻め方を見つける。	・楽しくゲームができる人数やコートづくり、プレー上の制限、得点の仕方、規則などを選ぶ。 ・簡単な作戦を立てる。	・人数やコートの広さ、プレー上の制限、得点の仕方などのルールを選ぶ。 ・自分のチームの特徴に応じた作戦を立てる。
話し合いの視点	・できている姿とできない姿を見つけて話す。	・本時のめあてに基づいて、気付いたことを話す。	・とらえたことを自分の体を使って話す。
振り返り	・自分がかんばったことをペアに話す。 ・ペアがかんばったことを拍手で認める。	・自分やチームができるようになったことや課題を話す。 ・チームの上達やきまりの守りぶりを拍手で認め合う。	・自分やチームのできばえをとらえて、次時への課題をもつ。 ・チームの成長を喜び合う。
具体的な声	<励まし> ・「がんばれ」と応援し、できたら拍手する。 <指示> ・「はい」と自分の意思を示す。 <助言> ・「今はこうだったよ。」と動きの結果や状態を示す。	(1, 2学年の内容に加えて) <励まし> ・よい部分を明らかにして認める。 ・失敗したときの励まし。 <指示> ・「○○さん」や「前」など、動きを助ける声。 ・めあての動きにかかわる声。 <助言> ・「こうやって練習するといいよ」と練習方法を示す。	(3, 4学年の内容に加えて) <励まし> ・前と比較してよくなった部分を明らかにして認める。 <指示> ・チームの連携プレーにかかわる声。 ・動きの要求。 <助言> ・「○○だから、□□ようにやるといいよ」と改善の方向を示す。
うまくできない子のコミュニケーション	・「できていたかどうか」を自分から尋ねる。 ・ペアの子の動きを見て、結果を伝える。	・うまくできないときに、どう動いたらよいか、どこを直すかよいかを尋ねることができる。	・自分ができていないことがわかり、改善するための方法を考え、仲間に確かめたり、尋ねたりすることができる。

おわりに

今回提起した試案(表6, 7, 8)はあくまで現段階での試案であり、今後実践を重ねて、それと照合して再構成や修正を行い、体育を専門としない多くの小学校教師を授業者として想定した指導モデルとなり得るものにしていきたいと考えている。

基本的な授業の準備（支柱を立てネットを張ること、指導計画づくり、学習カード作成など）から始まり、グループや個に適した課題把握、課題化の方法、実態に合わせた指導計画の再構成など、授業を行う上で考慮しなければならないことは数多く存在する。今後、この試案を基に実践を行うことを通して、それらに添えていくものにしていきたい。

これを参考に授業を行うことで、教師がある程度自信をもって「ネット型」と向き合うことができることを期待する。また、今回の体育科の学習指導要領の改訂の要点の一つである系統性を図ることについては、個々の担任の力だけでは解決できない内容であり、学校として、体育科主任等を中心とした組織的な取組が必要となる。そのような取組に対しても何らかの示唆となりうるようなものになりたいと考える。

また、仲間づくりに関わる教師の具体的な手だてによって、子どもたちの望ましい人間関係の醸成が図られるようにしたい。そこには、豊かな人間性の育成という教育課題に対する体育科としての大きな役割があると考えられる。集団スポーツの一つである「ネット型」（ボールゲーム）は、そのことに大きく貢献できるものと期している。子どもが夢中になってゲームを楽しみ、しかもそこに技能の向上が位置付き、教師と子どもにその確かな実感があり、その上で豊かな人間関係を育むことにつながる授業の在り方を目指して、引き続いて実践研究を行っていきたい。

（註）

- (1) アンダーハンドパス、オーバーハンドパスについて、ここでは厳密に規定して指導しているわけではなく、それに近い形のものも含む。そうしたものも含めて、アンダーパス、オーバーパスという言葉を用いる。
- (2) 小野和彦・岩田靖「小学校体育におけるネット型ゲームの授業実践－攻防一体プレイ型の教材づくりと授業成果の検討－」『教育実践研究（信州大教育学部附属教育実践総合センター紀要）』No.3 2002年
<http://cert.shinshu-u.ac.jp/center/bulletin/2002/03077>
 小野・岩田によれば、アーモンド（Almond,L）は、運動種目を「①侵入型、②ネット・壁型、③守備・走塁型、④ターゲット型」に、高橋建夫は「Ⅰ 攻守入り乱れ系（① シュートゲーム型・②陣取りゲーム型）、Ⅱ 攻守分離系（①連携プレイ型・②攻守一体型、Ⅲ 攻守交代系）」に分類しているとされる。
- (3) 廣瀬勝弘「ボールゲームをめぐる実践モデルの多様性と可能性を考える」『体育科教育』2010年10月号
- (4) 吉永武史・岡出美則「戦術学習に関する授業研究の示唆」『体育科教育』1996年6月号
 リンク（Rink）らは、ゲームを指導する際の問題点を先行研究に基づいて検討した上で、指導方法が生徒の学習成果に与える影響を明らかにするための実験を行ったという。
- (5) 偶土会とは、昭和29年創設の岐阜県学校体育研究グループの名称であり、体育授業過程の実践研究を岐阜県内の小・中学校の体育教師、指導主事、校長等が集まって行ってきた。